

(c) (b) の方法で次の行列を対角化したい.

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 1+3i & -2i \\ 1-3i & 1 & 2 \\ 2i & 2 & 1 \end{bmatrix}, \quad i := \sqrt{-1}$$

$|F_{k+1} - F_k|$ を最も大きくする方法で, $k = 1$ まで計算せよ.

3. 数値計算問題の解きにくさについて, 次の問に答えよ.

(a) 次の連立一次方程式は, 数値計算的に解きにくい. その理由を述べよ.

$$\begin{bmatrix} 2 & -1 \\ -2000 & 999.9 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

(b) 関数の集合 X には内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle : X \times X \rightarrow \mathbb{R}$ が定義されているものし, $\{\phi_j\}_j \subseteq X$ は基底であるとする. 関数 $f \in X$ を, $n+1$ 個の基底の線形和

$$f_n = \sum_{j=0}^n c_j \phi_j$$

で, 最小二乗近似する問題を考える.

$$\min_{c_j, j=0, \dots, n} \langle f - f_n, f - f_n \rangle$$

$\{\phi_j\}_j$ が直交基底である場合と非直交基底を用いた場合に, どちらが解きにくい
か, 理由を付けて答えよ.

4. 次の行列の最大特異値を求めよ. 数値計算的に求める場合は, アルゴリズムも明記
すること.

$$X = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 & 1 \\ -1 & 1 & 0 & -1 \end{bmatrix} \quad (3)$$

解答例

1. (a) $p(x)$ は

$$p(x) = -4x^3 + 6x^2 - 2x - 1 \quad (4)$$

である. Sturm 列は, $p_0(x)$ として

$$p_1(x) = \frac{d}{dx}p(x) = -12x^2 + 12x - 2, \quad (5)$$

$$p_2(x) = g_1(x)p_1(x) - p_0(x), \quad g_1(x) = a_1x + b_1 \quad (6)$$

$$p_3(x) = g_2(x)p_2(x) - p_1(x), \quad g_2(x) = a_2x + b_2 \quad (7)$$

である. $g_1(x)$, $g_2(x)$ の係数をそれぞれ求めると,

$$a_1 = \frac{1}{3}, \quad b_1 = -\frac{1}{6}, \quad a_2 = 18, \quad b_2 = 18$$

より,

$$p_2(x) = -\frac{2}{3}(x-2), \quad (8)$$

$$p_3(x) = 26 \quad (9)$$

を得る. 考えている閉区間は $[-1, 1]$ なので,

$$\begin{pmatrix} p(x) & p_1(x) & p_2(x) & p_3(x) \end{pmatrix}$$

にそれぞれ端の値を代入して符号変化を調べればよい.

$$\begin{pmatrix} p(-1) & p_1(-1) & p_2(-1) & p_3(-1) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 11 & -26 & 2 & 26 \end{pmatrix}, \quad (10)$$

$$\begin{pmatrix} p(1) & p_1(1) & p_2(1) & p_3(1) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -1 & -2 & \frac{2}{3} & 26 \end{pmatrix} \quad (11)$$

より, 符号変化の回数 $N(x)$ の差は

$$n = N(-1) - N(1) = 2 - 1 - 1 \quad (12)$$

となる. したがって, $[-1, 1]$ の間にある $p(x) = 0$ の解は唯一つ存在する.

(b) Newton 法より,

$$x^{(k+1)} = x^{(k)} - \frac{p(x^{(k)})}{p'(x^{(k)})} = x^{(k)} - \frac{p(x^{(k)})}{p_1(x^{(k)})} \quad (13)$$

を解けばよい. $x^{(0)} = -1$ より,

$$\begin{aligned} x^{(1)} &= x^{(0)} - \frac{p(-1)}{p_1(-1)} = -1 + \frac{11}{26} \\ &\simeq -1 + 0.42 = -0.58 \end{aligned} \quad (14)$$

を得る. $0.58^2 = 0.3364 \simeq 0.34$, $0.58^3 = 0.195112 \simeq 0.20$ であることを用いると,

$$\begin{aligned} p(-0.58) &= -4 \times (-0.58)^3 + 6 \times (-0.58)^2 - 2 \times (-0.58) - 1 \simeq 3.0 \\ p_1(-0.58) &= -12 \times (-0.58)^2 + 12 \times (-0.58) - 2 \simeq -4.1 - 7.0 - 2.0 \simeq -13 \end{aligned}$$

である。これを用いて同様に計算すると、

$$x^{(2)} = x^{(1)} - \frac{p(-0.58)}{p_1(-0.58)} \simeq -0.58 + \frac{3}{13} \simeq -0.35 \quad (15)$$

を得る。

2. (a)

$$A = \begin{bmatrix} a & b \\ \bar{b} & c \end{bmatrix}, \quad a, c \in \mathbb{R}, b \in \mathbb{C} \quad (16)$$

とする。このとき、 $b = |b|e^{i\theta_b}$ とおき、 $\phi = -\theta_b$ と置くと、

$$P^*AP = \begin{bmatrix} \cos(\theta) & -\sin(\theta) \\ \sin(\theta) & \cos(\theta) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} a & |b| \\ |b| & c \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \cos(\theta) & \sin(\theta) \\ -\sin(\theta) & \cos(\theta) \end{bmatrix} \quad (17)$$

となり、実対称行列の対角化問題となる。 θ を

$$\theta = \frac{1}{2} \arctan \left(\frac{-2|b|}{a-c} \right) \quad (18)$$

とすれば、式(1)で定義されるユニタリ行列で対角化可能である。

(b) 簡単のために、最初のステップのみを示す。 $B = (B_{ij}) = A^{(1)}$ とし、 P は A の (p, q) 成分を消去するようにパラメータが選ばれているものとする； $q > p$ とすると、

$$P_{ij} = \begin{cases} 1, & i = j, i \neq p, q \\ \cos(\theta), & i = j = p \\ \sin(\theta), & i = p, j = q \\ -e^{i\phi} \sin(\theta), & i = q, j = p \\ e^{i\phi} \cos(\theta), & i = j = q \\ 0, & \text{otherwise} \end{cases} \quad (19)$$

である。このとき、 $j \neq p, q$ とすると

$$\begin{aligned} B_{pj} &= \sum_{k,l=1}^n P_{pk}^* A_{kl} P_{lj} = \sum_{k,l=1}^n \bar{P}_{kp} A_{kl} P_{lj} \\ &= \bar{P}_{pp} A_{pj} + \bar{P}_{qp} A_{qj} = \cos(\theta) A_{pj} - e^{-i\phi} \sin(\theta) A_{qj}, \end{aligned} \quad (20)$$

$$\begin{aligned} B_{qj} &= \sum_{k,l=1}^n P_{qk}^* A_{kl} P_{lj} = \sum_{k,l=1}^n \bar{P}_{kq} A_{kl} P_{lj} \\ &= \bar{P}_{qp} A_{pj} + \bar{P}_{qq} A_{qj} = \sin(\theta) A_{pj} + e^{-i\phi} \cos(\theta) A_{qj} \end{aligned} \quad (21)$$

となる。他の要素は、次のようになる。

$$B_{ij} = A_{ij}, \quad i, j \neq p, q \quad (22)$$

$$\begin{aligned} B_{pp} &= \bar{P}_{pp} A_{pp} P_{pp} + \bar{P}_{pp} A_{pq} P_{qp} + \bar{P}_{qp} A_{qp} P_{pp} + \bar{P}_{qp} A_{qq} P_{qp} \\ &= \cos^2(\theta) A_{pp} + \sin^2(\theta) A_{qq} - e^{-i\phi} \sin(\theta) \cos(\theta) A_{qp} - e^{+i\phi} \sin(\theta) \cos(\theta) A_{pq} \\ &= \frac{A_{pp} + A_{qq}}{2} + \frac{A_{pp} - A_{qq}}{2} \cos(2\theta) - \operatorname{Re}(e^{-i\phi} A_{qp}) \sin(2\theta) \end{aligned} \quad (23)$$

$$\begin{aligned} B_{qq} &= \bar{P}_{pq} A_{pp} P_{pq} + \bar{P}_{pq} A_{pq} P_{qq} + \bar{P}_{qp} A_{qp} P_{pq} + \bar{P}_{qp} A_{qq} P_{qq} \\ &= \sin^2(\theta) A_{pp} + \cos^2(\theta) A_{qq} + e^{-i\phi} \sin(\theta) \cos(\theta) A_{qp} + e^{+i\phi} \sin(\theta) \cos(\theta) A_{pq} \\ &= \frac{A_{pp} + A_{qq}}{2} - \frac{A_{pp} - A_{qq}}{2} \cos(2\theta) + \operatorname{Re}(e^{-i\phi} A_{qp}) \sin(2\theta) \end{aligned} \quad (24)$$

$$\begin{aligned} B_{pq} &= \bar{P}_{pp} A_{pp} P_{pq} + \bar{P}_{pp} A_{pq} P_{qq} + \bar{P}_{qp} A_{qp} P_{pq} + \bar{P}_{qp} A_{qq} P_{qq} = 0 \\ &= \cos(\theta) \sin(\theta) (A_{pp} - A_{qq}) + e^{i\phi} \cos^2(\theta) A_{pq} - e^{-i\phi} \sin^2(\theta) A_{qp} \\ &= \frac{A_{pp} - A_{qq}}{2} \sin(2\phi) - i \operatorname{Im}(e^{i\phi} A_{pq}) + \operatorname{Re}(e^{i\phi} A_{pq}) \cos(2\theta) \end{aligned} \quad (25)$$

ただし、複素数 α に対して、

$$\operatorname{Re}(\alpha) := \frac{\alpha + \bar{\alpha}}{2}, \quad \operatorname{Im}(\alpha) := \frac{\alpha - \bar{\alpha}}{2i}$$

を表す。 ϕ は $\operatorname{Im}(e^{i\phi} A_{pq}) = 0$ となるように選んでいるので、教科書の p. 93 の議論の通り、

$$F_1 = F_0 - 2|A_{pq}|^2 \quad (26)$$

となる。同様の議論を繰り返して、任意の k に対して

$$F_{k+1} - F_k = -2|A_{pq}^{(k)}|^2 \leq 0 \quad (27)$$

を得るので、各ステップ k で非ゼロの非対角成分を選択することで、漸近的に非対角成分をゼロにすることができる。その結果、対角成分には固有値が残る。

(c) 最初のステップにおいて、非対角要素で最も大きな成分は、 $|A_{2,1}| = \sqrt{10}$ である。 $A_{2,1}$ の実部は 1、虚部は -3 であるので、 $\phi_1 = -\arctan(-3)$ とおくと、

$$\begin{aligned} e^{-i\phi_1} &= \underbrace{\cos(\phi_1)}_{=\frac{1}{\sqrt{10}}} + i \underbrace{\sin(\phi_1)}_{=\frac{3}{\sqrt{10}}} \end{aligned}$$

であるので、

$$\begin{aligned} \cos(2\theta_1) &= \frac{|A_{pp} - A_{qq}|}{\sqrt{4|A_{pq}|^2 + (A_{pp} - A_{qq})^2}}, \quad \cos(\theta_1) = \sqrt{\frac{1}{2}(1 + \cos(2\theta_1))}, \\ \sin(\theta_1) &= \operatorname{sgn}(-A_{pq}(A_{pp} - A_{qq})) \sqrt{\frac{1}{2}(1 - \cos(2\theta_1))} \end{aligned}$$

を用いると,

$$\begin{aligned}
 A^{(1)} &= P_1^* A P_1 \\
 &= \begin{bmatrix} \cos(\theta_1) & -\sin(\theta_1) & 0 \\ \sin(\theta_1) & \cos(\theta_1) & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & \sqrt{10} & -2i \\ \sqrt{10} & 1 & 2e^{-i\phi_1} \\ 2i & 2e^{i\phi_1} & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \cos(\theta_1) & \sin(\theta_1) & 0 \\ -\sin(\theta_1) & \cos(\theta_1) & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \\
 &= \begin{bmatrix} 1 - \sqrt{10}\sin(2\theta) & 0 & -2i\cos(\theta_1) - e^{-i\phi_1}2\sin(\theta_1) \\ 0 & 1 + \sqrt{10}\sin(2\theta_1) & -2i\sin(\theta_1) + e^{-i\phi_1}2\cos(\theta_1) \\ 2i\cos(\theta_1) - e^{i\phi_1}2\sin(\theta_1) & 2i\sin(\theta_1) + e^{i\phi_1}2\cos(\theta_1) & 1 \end{bmatrix}
 \end{aligned}$$

解答はここまで書いてあればよく, 各要素を具体的に求める必要はない.

3. (a) 行列 A は, 1 行目と 2 行目のベクトルは, 独立であるものの従属性が大きい. そのため, 行列 A の条件数が悪くなり, 浮動小数点数表示によって誤差が大きくなりやすい.

(b) 基底 $\{\phi_j\}_j$ を用いたとき,

$$\langle f - f_n, f - f_n \rangle = (Ac - b)^\top A^{-1}(Ac - b) + \langle f, f \rangle - b^\top A^{-1}b \quad (28)$$

となる. ここで

$$A = (A_{ij}) = (\langle \phi_i, \phi_j \rangle), \quad c = (c_j), \quad b = (b_j) = (\langle \phi_j, f \rangle) \quad (29)$$

とした. A が逆行列をもち, かつ正定値対称行列であることに注意すると,

$$Ac - b = 0 \quad (30)$$

を満たす $c \in \mathbb{R}^{n+1}$ が最適解である.

ここで, $\{\phi_j\}_j$ が直交基底であるならば, A は対角行列となり, $c = A^{-1}b$ が少ない計算で求められる. 一般の場合は計算量が $O(n^3)$ 程度になってしまい, 数値誤差が大きくなる可能性がある. したがって, 直交基底を用いたほうが解きやすい.

4. 行列 X の最大特異値は, $X^\top X$ の非ゼロの最大固有値の平方根, または XX^\top の非ゼロの最大固有値の平方根である. 数値計算的には小さな次元で計算することが得なので, XX^\top を求めると,

$$XX^\top = \begin{bmatrix} 15 & 0 \\ 0 & 3 \end{bmatrix} \quad (31)$$

を得る. この行列はすでに対角行列であるので, 対角要素の平方根が特異値である. よって, X の最大特異値は, $\sqrt{15}$.